

綿矢りさの出発点

岩田英作
(国文教室)

The literary debut of Risa Wataya

Eisaku Iwata

キーワード：仮想現実・他者・自意識

はじめに

綿矢りさは、二〇〇三年、「蹴りたい背中」によって第一三〇回芥川賞を金原ひとみ「蛇にピアス」とともに受賞した。綿矢一九歳、金原二〇歳という史上最年少の受賞ということもあって、世間でも騒がれた。綿矢は、「蹴りたい背中」のまえに、二〇〇一年、「インスタール」によって第三八回文藝賞を受賞している。

「インスタール」「蹴りたい背中」ともに高校生が主人公である。「インスタール」では、インターネット上のチャットの世界に入り込む高校生、「蹴りたい背中」では、グラビア・アイドルにのめりこむ高校生が描かれる。現実の人間関係を一方に置き、それに対置するかたちで仮想の現実が配されている点で、両作品は共通している。その両極のあいだにあって、人はいかに生きるか。綿矢りさというひとりの若き作家の関心のありかも、ほぼそのあたりにあるといつてよい。

小論では、「蹴りたい背中」を中心に取り上げ、そこに描かれた現代社会に生きる若者の姿を通して、作者が右のテーマといかに向き合っているのかについて考えてみたい。

一 「インスタール」について

「インスタール」は、一七歳の高校三年生、野田朝子の物語である。人の目標が見つからない朝子は、それまで無遅刻無欠席だったにもかかわらず、突如として四週間学校を休むことになる。その間、朝子は小学六年生の青木かずよしとともに風俗チャットの世界に入り込む。物語の中心は、その四週間の朝子の経験から成る。その四週間が、すなわち朝子にとってのインスタールの期間、自分をリセットしなおす期間である。

朝子はチャットの中では二六歳の人妻に扮しており、どこの誰ともわからない匿名の男性とパソコンを通じた会話をする。年齢、職業、経歴、趣

味、容姿、すべてをお互いに偽ることが可能であり、それを前提になにものかになりすまして、性的な会話を楽しむのである。この、実体と乖離した人間関係が描かれる中で、チャットの用語の「落ちる」という言葉が出てくる。「落ちる」とは、チャットの部屋から退室し、相手との会話を終了する意味で用いられる。

一人の男が落ちた後、入れ替わりでやってきた新しい男と、また自己紹介から始めなきゃいけない。この果てしない一期一会は「落ちる」をキーワードにして私の目の前で繰り返される。

朝子は、客を待つ、すなわち部屋にだれかが来るのを待っている立場だから「落ちる」ことは許されない。「落ちる」のはもっぱら相手の男性であり、男性は人妻に扮した朝子との会話に飽きれば、一方的に「落ちる」ことができるわけだ。

ところで、「落ちる」という表現やそれに類する言葉は、チャット用語に限らず作品中に散りばめられている。たとえば、同じマンションに住む大学生が屋上から飛び降り自殺した事柄について、「つい最近、今年の四月に大学生の男が自分の意思でここから落ちた」とある。また、一学年上から落第してきた生徒については、「私はあの一学年上からうちのクラスに落ちこつてきた先輩を鮮明に思い出し、青くなつた。(中略・筆者) 松本さんは少しグレ気味な女の子で、そのせいで落ちてきたのだが、(以下略・筆者)」とある。さらに、これは表現が異なるが、チャットの会話部分に、「みやび」そうよ、あなた自身の墮落論について延々聞いてあげた雅よ、浪人さん。」というのがある。

「落ちる」をキーワードとするチャットの人間関係は、自殺や落第、墮落と共鳴しながら、次第にネガティブな色彩を帯びていき、朝子自身もその関係にむなしさを覚える。しかし、チャットの世界から朝子が離れることになつたのは、彼女の自力によるものではなかつた。

朝子の母は、娘の部屋にもほとんど立ち入ることがなく、朝子に対して無関心な母として登場する。しかし、朝子が学校を内緒で休んでいることを知り、母親は朝子に涙を見せる。

母の背中を見て、はっとした。震えている、泣いているのだ。私は思わずのけぞつた。

母が泣くなんて、まるで怪談で、顔面の筋肉が凍りつく。

母親の涙に対する朝子の反応は、驚きが強く、この一件によつて朝子が母親の情愛をひしひしと感じたり、あるいは逆に母親に対する情愛が芽生えたりというところまでは至っていない。しかしながら、このことが生身の人間に対する肯定的な受けとめ方を朝子に促したのは間違いない。

母親と同様に、青木夫人も朝子にある種のインパクトを与えたひとりである。朝子は一ヶ月のあいだ、無断で青木家に出入りしていたが、その間、朝子は青木家の冷蔵庫のコーラを毎日飲んでた。青木夫人はそれに気づきながら、朝子のためにコーラを買い続けたのである。

母親の涙とコーラの事実は、朝子が「久々に生身の人間から受けたショック」として描かれている。

それに続いて、物語の終わりに、朝子の生身の人間に向かう気持ちがあるストレートに表明されている。

何が変わつた？ 何も変わらない、私は未だ無個性のろくでなし。ただ、今私は人間に会いたいと感じている。昔からの私を知っていて、そしてすぐに行き過ぎてしまわない、生身の人間達に沢山会つて、その人達を大切にしたいと思つた。忘れていた真面目な本能が体の奥でくすぶっていた。

朝子は学校を休んでチャットの世界に落ちていき、ふたたびそこから生身の人間の世界にもどつていく。そもそも朝子が学校を休むことになつた理由は、朝子本人にとつてもけつして明確なものではない。人生の目標がわからないというぼんやりとした不安は語られるが、だから学校を休んだというふう因果関係がはつきりしているわけではない。なんとなく休んだらそのままする学校に行く気がなくなつたという感じである。

対人関係についても、母親の無関心ということはあるが、それで朝子が大きなダメージを受けていたというようには描かれていない。ふれあいの少ない親子関係について、「私達母子はきつとプライベートの意味を勘違いしている」という程度の感想があるだけで、母親との関係についてくわしく述べられているわけではない。友人関係についても、朝子はとくに悩みをかかえていたようには見えない。たとえば、クラスメイトの女の子たちのおしゃべりについて、朝子は「みんな騙しあいつこをしている」と

の感想を持つ。「受験勉強シテル? マッサカー私昨日九時二寝チャッタ、本当ダヨウダカラコンナニ元氣ナノ。じゃあその目の下の隈は何だと聞きたい」とあり、なぜそのように頑張っていない自分をアピールするのかについて、「やはり自分を天才だと思わせたいし思い込みみたいからだ」と朝子は思う。このエピソードは、騙しあいがお互いの距離を生じさせ、そこから人間不信につながっていくというようには発展していかない。

したがって、朝子がチャットという仮想現実の世界に入っていく動機づけは希薄なものである。学校を休んで、青木かずよしと知り合い、それをきっかけにたまたまチャットを知ってするようになったという程度のことである。朝子がチャットでとくにかかわる人物は聖霊という名の男性である。聖霊は朝子扮する雅が本物かどうか執着し、つまりは、にせの関係を前提に性的な会話を楽しむチャットの世界で本物を求める人物である。しかし、聖霊の見せた屈折が朝子にかなる影響を及ぼしたのかはわからない。聖霊が一方的にチャットを打ち切り、それに対する朝子の反応も描かれぬまま、話は先述の母親と青木婦人のことにつながってしまうからである。

現実から仮想現実へ、そして再び現実へと朝子はV字の軌道を描く。しかし、そのつながりはいかにも弱く、ふたしかである。したがって、朝子が最後にたどりつた、「生身の人間達に沢山会って、その人達を大切にしたい」との思いも、どこかとってつけたようなところがあって、読者の心にそれほど響いてはこないのである。

二、「蹴りたい背中」について

他者の否定と自己肯定

「蹴りたい背中」では、高校一年生の長谷川初実とその同級生であるにな川智のかかわりが中心に描かれている。「インスタール」では語り手である主人公が、チャットの世界に入っていくさまが描かれていたが、「蹴りたい背中」では、主人公の初実は仮想の現実に入り込むわけではない。対するにな川がグラビアのアイドルにのめりこんでおり、そのにな川を、語り手である初実の視点で眺め、かかわっていく設定になっている。題名にある背中を持ち主はにな川であり、その背中を蹴りたいと思ったのは初

実である。

次に引用するのは作品の冒頭である。

さびしさは鳴る。耳が痛くなるほど高く澄んだ鈴の音で鳴り響いて、胸を締めつけるから、せめて周りには聞こえないように、私はプリントを指で千切る。細長く、細長く。紙を裂く耳障りな音は、孤独の音を消してくれる。気怠げに見せてくれたりもするしね。葉緑体? オオカナダモ? ハッ。っていうこのスタンス。あなたたちは微生物を見てはしゃいでいるみたいですけど(苦笑)、私はちよつと遠慮しておく、だってもう高校生だし。ま、あなたたちを横目で見ながらプリントでも千切ってますよ、気怠く。っていうこのスタンス。

三浦哲郎は、芥川賞の選評の中で、「この人の文章は素直に頭に入ってこなかった。たとえば、『葉緑体? オオカナダモ? ハッ。っていうこのスタンス』という不可解な文章。私には幼さばかりが目につく作品であった」と述べている。不可解かどうかは別として、印象に残るフレーズではある。この場面は理科の授業中であり、五人ごとに班をつくることになったのである。そこで仲間のいない初実とな川は余りの椅子に腰掛けることになる。順番に顕微鏡をのぞくのであるが、ふたりに順番が回ってくることはない。初実はそれを横目で見ながらプリントをちぎっているのである。「葉緑体? オオカナダモ? ハッ。っていうこのスタンス」には、二つの意識の向きがある。「葉緑体? オオカナダモ? ハッ」の部分からは、顕微鏡をのぞく同級生に対していくらか斜に構えて馬鹿にしている初実の意識がうかがえる。続く「っていうこのスタンス」の部分では、同級生に対してそういう見方をする自分に対して意識は向かっている。

初実の同級生には中学時代に仲のよかった絹代もいる。しかし、絹代も他のグループに加わってしまい、初実は自分から絹代ほかの同級生に働きかけることもできず、クラスで浮いた存在となっている。初実の意識は、さきの部分に象徴されるように、クラスの仲間に対する否定的な意識と、仲間を否定する自己に対する意識がたえず表裏一体となって描かれる。では、初実が同級生に素直にとけこめないのはなぜか。

私は、余り者も嫌だけど、グループはもつと嫌だ。できた瞬間から繕わなければいけない、不毛なものだから。中学生の頃、話に詰まっ

て目を泳がせて、つまらない話題にしがみついで、そしてなんとか盛り上げようと、けたたましく笑い声をあげている時なんかは、授業の中休みの十分間が永遠にも思えた。自分がやっていたせいとか、私は無理して笑っている人をすぐ見抜ける。大きな笑い声をたてながらも眉間に皺を寄せ、目を苦しげに細めていて、そして決まって歯茎を剥き出しそうになるくらいカツと大口を開けているのだ。顔のパーツごとに見たらちつとも笑っていないからすぐ分かる。

笑いたくないのに笑ってしまうという感覚。仲間とつながるために自分が演じてしまうという感覚。人間関係において、そういうことは誰しも多かれ少なかれ経験することだろう。大人になると、いちいちそういうことを意識することもなくなりがちである。演じることに対するつよい自意識、自分が演じて他者とつながるくらいなら余り者になるほうがまだましだというある種の潔癖さは、思春期の大きな特徴ではなからうか。作者は、あるインタビュの中で、太宰治を愛読したと言っているが、他者とつながるために演じるといった文脈はまことに太宰的である。池澤夏樹は、この作品について、「高校における異物排除のメカニズムを正確に書く伎倆に感心した」と述べているが、本作品に描かれているのは異物排除のメカニズムではなく、みずから異物になろうとする意識のメカニズムである。初実の周囲の人間関係に対する否定的な見方は、異物である自己の正当化と裏腹である。そのため、初実には周囲のことをことさらに悪くいすぎるところがある。その好例が、陸上部員と顧問の先生に対する初実の見方である。初実が走っている最中に転んで、仲間がかけよってくる。と、初実は「私を本気で心配しているわけじゃない、ただみんなサボりたいんだ」と思う。初実の転倒にびつくりして部員が何週走ったかを忘れてしまったと先生に告げると、先生は渋い顔をする。その表情を見て、初実は「演技くさい、ぎこちない眉間の皺の寄せ方」と思う。先生の冗談に笑う部員たち、先生が部員に向ける笑顔、そのことごとくが、初実の主観においては嘘っぽくうつる。そう思うことによって、自分の殻に閉じこもる自分自身を肯定する一方で、初実は、他者をそのようにしか見ることができない自分に對して、やりきれない思いも持っている。練習中に先生に励まされて、初実はつい泣きそうになる。その直後の初実の内面は次のようなものである。

認めてほしい。許してほしい。櫛にからまった髪の毛を一本一本取り除くように、私の心からみつく黒い筋をつまみ取ってごみ箱に捨ててほしい。

人にしてほしいことばかりなんだ。人にやってあげたいことなんか、何一つ思い浮かばないくせに。

ここには他者に受け入れてもらいたいという願いがある。自己中心的な自己に対する反省がある。他者の否定の上に成り立った自己正当化からなんとか脱け出したいという欲求がある。

二つの背中

前に述べたように、初実にとつて蹴りたい背中とはにな川の背中のことである。しかし、この作品には、にな川の背中だけではなく、初実自身の背中も描かれている。まずは、初実がにな川の背中を蹴る場面から見よう。

「なんで片耳だけでラジオを聴いているの？」

振り向いた顔は、至福の時間を邪魔されて迷惑そうだった。発見。にな川つて迷惑そうな表情がすごく似合う。眉のひそめ方が上品、片眉が綺麗につり上がっている、そして、私を人間とも思っていないような冷たい目。

「この方が耳元で囁かれてる感じがするから。」そう言つて、またラジオに向き直る。

ぞくつときた。プールな気分は収まるどころか、触るだけで痛い赤いきびのように、微熱を持って膨らむ。またオリチャンの声の世界に戻る背中を真上から見下ろしていると、息が熱くなってきた。

この、もの哀しく丸まった、無防備な背中を蹴りたい。痛がるにな川を見たい。いきなり咲いたまっさらな欲望は、閃光のようで、一瞬目が眩んだ。

瞬間、足の裏に、背骨の確かな感触があった。

にな川は、授業中も雑誌のオリチャンに見入っている人物である。初実と同様クラスの余り者である。家庭においても、離れの部屋で暮らし、炊事洗濯も自分でしている。実に希薄な人間関係しか持たず、雑誌やラジオ

を通して、ひたすらオリチャンとだけ一方的につながっている。右の場面の直前に、初実は、にな川がオリチャンに関するものを収集しているファンシーケースの中から、オリチャンの顔の切り抜きに女の子の裸の写真をくつつけてあるものを見つけ悪寒を覚える。そうしてにな川は、目の前にいる初実には背を向けて、「耳元で囁かれてる感じ」、すなわち二セの生々しさに浸ろうとしているわけである。初実の蹴りは、現実から遠ざかり仮想の世界でごまかそうとするにな川に対して、痛みによって現実のほうを振り向かせようとする一撃であった。

と同時に、この蹴りは、にな川のみでなく、初実にとっても「確かな感触」として意味を持つ。

授業中になると、私は頬杖をついて、教壇のすぐ前の席に座っている彼を見つめている。背中を蹴った時のあの足裏の感触を反芻しながら。すると身体が熱くなってくる。でも目だけは冷静に、彼を「観察」している。目つきと身体の温度が相反している「冷えのぼせ状態」だ。こんな目つきで男子を見ることに、なんとなく罪悪感を感じて、にな川が少しでも動くときすぐ目をそらす。私の学校での鮮やかな感情といえば、この冷えのぼせ「だけ」だけで、授業も教室の喧騒も灰色にくすんで、家に帰っても学校で何があったかよく思い出せない。たまった緊張のせいで背骨がきしむような痛みだけが残っている。

自分の殻に閉じこもっている初実にとつて、「足裏の感触」を残したにな川とのふれあいは、ひとつの画期的な出来事であったに違いない。しかしながら、その事実は体に熱をもたらずにとどまって、初実の意識を変えるところまでは至っていない。引用の末文には、痛みとともに初実の背骨が描かれている。初実は、昼食時に絹代の誘いをことわり、弁当をひとりで食べている。しかも、窓際でカーテンの中に閉じこもって食べるのである。「いかにも自分から孤独を選んだ、というふうに見えるように」カーテンの中にいる初実は、孤独を愛するふりをしながら、実のところ他者を欲している。背骨の痛みの原因である緊張感とは、学校にいるあいだ他者をたえず意識しながら意識していないように見せかける、その屈折した不連続の努力からきているのではないだろうか。

初実とにな川、ふたりの背中はとても似て見える。生身の人間とつなが

りたいのに、その一步を自分から踏み出せないでいる背中。初実が蹴ったにな川の背中、きつと自分の背中だったはずである。

夜明け前

初実とにな川は、絹代とともにオリチャンのコンサートに出かける。絹代は、初実とにな川がお互いに好きなのではないかと初実に尋ねるが、初実の反応は、「絹代の言っていることは途方もなくずれている」、「好き」という言葉と、今自分がにな川に対して抱いている感情との落差にぞっとした」というものである。初実の主観において、にな川が好きではないことは明らかである。しかし、それでは「今自分がにな川に対して抱いている感情」とはいかなるものかといえば、それははっきりとしない。

コンサートが終わわり、楽屋口から出てきたオリチャンにな川は近寄り、スタツフに止められる。そのときオリチャンは、にな川に一瞥もくれずに去って行った。その晩、初実と絹代はにな川の家泊まることになり、にな川は部屋のベランダで寝ることになる。物語は、明け方、初実がベランダに出て、にな川とやりとりをする場面で閉じられる。

「オリチャンに近づいていったあの時に、おれ、あの人を今まで一番遠くに感じた。彼女のかげらを拾い集めて、ケースの中のためこんでた時より、ずっと。」

言葉の続きを待たせられ、彼はそれ以上何も言わず、眠ろうとするかのように寝転んだ。私に背を向けて。

川の浅瀬に重い石を落とすと、川底の砂が立ち上って水を濁すように、あの気持ち「が底から立ち上ってきて心を濁す。いためつきたい。蹴りたい。愛しさよりも、もっと強い気持ちで。足をそつと伸ばして爪先を彼の背中に押し付けいたら、力が入って、親指の骨が軽くぽきつと鳴った。」

「痛い、なんか固いものが背中当たってる。」

足指の先の背中がゆるやかに反る。

「ベランダの窓枠じゃない？」

にな川は振り返って、自分の背中の後ろにあった、うすく埃の積もっている細く黒い窓枠を不思議そうに指でなぞり、それから、その段の

上に置かれている私の足を、少し見た。親指から小指へとなだらかに短くなっていく足指の、小さな爪を、見ている。気づいていないふりをして何食わぬ顔でそっぽを向いたら、はく息が震えた。

初めて生身のオリチャンに接したにな川は、オリチャンを「今までで一番遠くに感じた」という。自分の中でこしらえあげた偶像とのギャップに、にな川はうちのめされる。そして、会場へ向かう途中では、初実の手をつかんでひっぱるといふ積極的な面ものぞかせたにな川であるが、この場面でふたたび初実に背中を向ける。一方、背中を向けられた初実は、爪先をにな川の背に押し付ける。しかし、その指先をにな川が見ていると気づくや、「気づいていないふりをして何食わぬ顔でそっぽを向い」てしまうのである。背を向けるにな川と、そっぽを向く初実。ここでも二人は鏡像関係になっている。いま、目の前にいる生身の人間と、確かな手ごたえでもって結ばれる一歩手前で、二人ははまだ足を踏み出せないでいる。朝が始まるうとして、「暗くて形しか分からなかった」ものが「徐々に姿を現わし始める」、その予感のうちに物語はしめくくられる。

おわりに

「蹴りたい背中」は地味な作品である。「インストール」のチャットのように、いまどきの世相を取り入れているわけではなく、グラビア・アイドルに熱をあげる男子高校生にしても、グループをつくることに忙しい女子高校生にしても、むしろ古典的ときへ言いたくなるくらいに、オーソドックスな人物構成である。物語の展開についても、「インストール」に見られるような、落ちて、また上昇するという動的な展開は、「蹴りたい世界」にはない。物語のはじまりとおわりで、初実やにな川の立っている場所に、はつきりとした違いはない。ふたりは、V字の底でうずくまり、身もだえしているかのようである。

「インストール」と「蹴りたい背中」は、ともに現実と仮想の現実のあいだでうごめく人間模様を描きながら、その差は歴然としている。「インストール」に見られる、生身の人間とのつながりの安易な回復は、「蹴りたい背中」では峻拒されている。つながりを求めながら、拒んでしまっ

その微妙な葛藤のうちに、「蹴りたい背中」の質は保たれている。出口は見えそうで見えない。しかし、作者はスタート・ラインに立ったばかりである。次作を待ちたい。

1 「文藝春秋」(平成十六年三月号)

2 「文藝春秋」(平成十六年三月号)におけるインタビュー「太宰治を片端から読みながら」の中で、綿矢りさは次のように言っている。

「太宰を最初に読んだのは、高校の国語の試験の問題で『富嶽百景』や『走れメロス』みたいな作品が出たんです。それが面白かったので、図書館に行って全集を片っ端から借りて読みはじめました。『文学』として読むんじゃなくて、この言葉遣いがカッコいいとか、締め言葉がうまいな！とか感心したりしていました。太宰の本は子供向けの本とは違って、何度も読み返しました。」

これを読む限り、綿矢は太宰の小説の内容よりは表現の面に興味を持ったように受け取られるが、筆者は、その内容において綿矢が十分に影響を受けていると考えている。

3 「文藝春秋」(平成十六年三月号) 芥川賞選評

作品からの引用は、「インストール」(二〇〇一年十一月、河出書房新社)、「蹴りたい背中」(二〇〇三年八月、河出書房新社)に拠った。

(平成十七年十月三十一日受理)